

2007 年度

科目名 ジェンダー論（総合講座）	対象学科・学年 文学部全学科3回生 教育教福3回生	担当者 岡島 克樹
授業テーマ 「性」に関する「常識」「思い込み」を疑うための「基礎体力」を開発する。		
授業の概要と目標 「性」は、語りの寡少と過剰の中で、「常識」や「思い込み」というものが充満している。例えば、「性別」には「男性」と「女性」の二つしかない、「セクシュアリティ」には「異性愛」しかないと思いつこんでいる人がほとんどではないだろうか。本講は、こうした性に関する思い込みや常識を問うてきたジェンダー論の歴史的発展・関心の変遷、ジェンダー論で頻繁に用いられる基本的な用語について解説する。また、受講者とともに、この思い込みが自分自身や他者および社会全体に与える害について検討し、そのような思い込みが生まれる背景・構造を見つめ、これを転換するための方途について考えていく。		
評価方法 前期末レポートおよび授業への貢献（外部講師によるレクチャーへの参加等）		
テキスト 適宜コピーして配布する。	著者	出版社
参考書 適宜指示する。	著者	出版社
授業スケジュール・内容 <内容1> 上記のように、「性」をめぐるは、様々な「常識」「思い込み」が存在する。ジェンダー論は、このような「常識」とは何か、また、それが何故、どのようにして生起するのかを問い、どのようにすればそのような「常識」を生む社会の構造を転換していくことができるのかを検討する学問として、誕生し、成長してきた。 ただし、「性」をめぐる「常識」は時代とともに変化してきている。（世界にはなお女性の投票権すら認めていないところもあるが）多くの場所ではかつて存在していた政治的権利に関するあからさまな男女間格差は少なくとも制度上存在しなくなってきた。一方、従業員1000名以上を雇用する大企業における男女間の給与格差が億単位で存在する日本を含めて、男女間に著しい経済格差があっても仕方がないという「常識」が存続しているところもある。また、このような政治や職場といった公的領域における男女間格差に加えて、家庭や恋人関係といった私的領域では、既に家事・育児に関する負担についての男女間格差の解消に一定成功した国もあれば、日本のようになかなか解決することができないところもある（このような私的領域における男女間格差の解消は男女共同参画社会を目指す日本政府の政策の前提となっている）。さらに、90年代初頭以降のゲイブームや2000年代以降の性同一性障がい者による運動の進展に見られるように性的マイノリティに対する理解は一定進んできているが、なおいろいろな「思い込み」を持つ人は多い社会も存在する。従って、ジェンダー論の成長とは、時代や場所それぞれが抱える、異なる問題・ニーズに応じて、フォーカスするポイントを変えながら、行われてきたものである。 本講では、まず、このようなジェンダー論の歴史的な経緯や主要な関心の移り変わりに関して講義を行う。 <内容2> 現在、一つの英単語に込められた深く豊かな意味を一語で表す日本語がないため、カタカナ表記して使うことが増えてきている。ジェンダー論も例外ではなく、そこで用いられる用語にはカタカナのものが少なくない。そこで、本講では、性自認、性別、性役割、性差、本質主義・構築主義、脱構築、商品化といった熟語の他、ジェンダー・フリー、セックスワーク、ホモフォビア、ホモソーシャルティ、クイア理論、フェミニズムとポストフェミニズム、バックラッシュ、GEM、FGM（性器切除）といったジェンダー論で頻繁に用いられるカタカナ専門用語もあわせて紹介する。本講を通じてジェンダーに関する興味・関心を持ってくれた受講生諸君には、本講で身につける「ジェンダー語の基礎文法」についての知識を駆使して、本講終了後もジェンダーに関する書籍を自力で読み、さらに問題意識を深め、行動していってほしい。 <教材・方法等> 受講生は、卒業後、結婚し家庭の主婦・母親になる、あるいは教育や福祉の現場や企業という職場で働く。そして、その中で、子どもたちや職場の同僚・後輩などに影響を与える立場に立ち、本シラバスの最初で記したような「思い込み」の強化・拡大に貢献してしまうこともある。本講では、なるべく受講者の興味・関心に沿って、教育や福祉などに関連する教材を選びながら講義を展開していきたい。 また、ジェンダー論は他学問すべてに横断的にかわるものである。特定の下部分野については、担当教員のネットワークを利用して、その下部分野に精通した外部講師（外部のゲストスピーカー）を招くことがある。本講には出席点を設けることはないが、外部講師の回のみ（どの回が外部講師になるかは日程が決まり次第講義の中で伝える）、受講生全員参加とするので、やむをえず欠席する場合は理由を記した紙の提出を求める。		